

個々の課題を捉え、実態に即した 家庭学習や補習を実施

東京都墨田区立第三吾嬬小学校

学習習慣や生活習慣を課題と捉えている墨田区立第三吾嬬小学校。授業と共に、家庭学習や補習の充実を図り、個々の課題にきめ細かく対応する取り組みを通じ、子どもたちが学習に向かう姿勢に変化が現れている。

取り組みのポイント

- 分かりやすい授業を目指すと共に、家庭学習と補習を充実。教師全員が力を合わせ、学力の底上げや学習習慣の確立を図る
- 家庭学習の方針は、発達段階や個々の子どもの実態を踏まえて各学年で検討。「家庭学習プリント」や「忘れ物カード」などで学習習慣と生活習慣の改善を目指す

課題と手立ての基本方針

学習習慣や生活習慣に課題 家庭学習と補習で授業を支える

第三吾嬬小学校は町工場が集まる下町情緒の感じられる住宅街にある。昔からの住民が多く、町内会などの活動が活発で、地域全体で子どもを育てる雰囲気があるという。金谷政一校長は子どもの様子を次のように話す。

「本校に赴任した教師が最初に驚くことは、子どもたちの人懐っこさです。明るく元気で、学校が大好きな子どもが大勢います。一方で、自分で考えて努力をする前に、人に頼ってしまう傾向が気になっています。子どもがこれ

S c h o o l D a t a

◎1875（明治8）年開校。
学区内には五つの地域に「子ども会」があり、PTA組織の一部として活動するなど、地域社会と一体になって子どもたちを支えている。



校長 金谷政一先生

児童数 520人 学級数 17学級

所在地 〒131-0041 東京都墨田区八広2-36-3

TEL 03-3617-7513

URL <http://members2.jcom.home.ne.jp/sanazumasho-sumida/>

公開研究会 未定

からの社会を生き抜くために、主体的に考えて行動する力を育みたいと思っています」

学習面では、全体的に基礎学力に不足が見られ、2009年度の区の学力調査では平均に届かなかった。また、3年生頃から学力差が目立ち始め、中学校で授業に付いていけない子どもがいる。家庭での学習習慣だけでなく、基本的な生活習慣が十分に身に付いていない子どももあり、担任1人では指導に困難を感じることもあった。そこで、学年全体で子どもを見てきめ細かく指導しようとして、全学年で学年担任制を採用している。

金谷校長は、学力向上を第一の目標に掲げていると話す。

授業づくりと共に深める家庭学習

「すべての子どもに、公立中学校の授業に付いていける学力を育みたいというのが、教師共通の思いです。心が豊かになるためにも、学びを大切にすることは欠かせません。学習の土台となる生活習慣の定着、体力の向上と併せて、学力向上を目指しています」

施策は「授業改善、補習、家庭学習」を柱とする。授業を理解することが学力向上の第一歩とし、学んだことを子ども自身が実感できるように、学習課題とまとめが明確な授業を目指す。研究授業は全教師が年1回行う。

ただし、理解度には個人差があり、授業だけでは学力が十分に定着しない子どももいる。研究主任の上田智恵子先生はこう話す。

「授業では分かったつもりでも、家で1人で取り組もうとすると出来なかつたり、次の授業までに忘れてしまつたりする子どもがいます。基礎・基本の定着が、本校の大きな課題です」

このような子どもを意識して行っているのが補習だ。毎週金曜日の放課後と、月2回の土曜日に実施。子ども一人ひとりの課題に即して、力を伸ばせるように指導している。

家庭学習の位置付け

学力と学習習慣定着のために

実態に即して学年団で方針を検討

家庭学習指導では、基礎・基本の定着と、

学習習慣の確立を図る。副校長の荒堀正実先生は次のように話す。

「中学生になった時、たとえ授業で難しい課題があつても、自分で学習する習慣があれば付いていけるからです」

家庭学習の目安は「学年×10分」だ。低学年では宿題が中心で、4年生から徐々に自主学習を取り入れる。内容や取り組み方は学年ごとに検討する。子どもと教師の関係を重視しつつ、発達段階や実態に応じた指導をするためだ。また、学年ごとに方針を統一することによって学年の教師間の連携が強まり、学年担任制の良さが更に引き出される。学年で成功した取り組みは全校で共有し、学年の実態に合わせて応用される。

各学年団は、年度の始めに話し合い、学年経営案と家庭学習の方針を「学年マニフェスト」として明文化している。教務主任の田路邦雄先生は次のように説明する。

「明文化する過程で考えが深まりますし、目的意識も教師間で共有しやすくなります。『目標を達成しよう』という気持ちが強くなるのも良さだと思えます」

家庭学習の具体例

1枚のプリントに宿題をまとめ

連絡帳を生活記録として活用

家庭学習の特徴的な取り組みを見ていこう。

【5年生】

学習習慣や生活習慣が身に付いていない子どもが多かつたため、対策の一つとして「家庭学習プリント」を始めた（P.24写真1）。



金谷政一 Kanaya Masakazu
墨田区立第三吾嬬小学校校長

「教育のすべては、子どもたちのためである。本当に子どものためになつていくかを常に考えたい」



荒堀正実 Aahori Masami
墨田区立第三吾嬬小学校副校長

「子どもの話も教師の話もよく聞き、何を考え、求めているかを理解したい」



田路邦雄 Toji Kinjo
墨田区立第三吾嬬小学校
教務主任、3学年担任。「子どもも教師も一人の人間として好きになり、認めることを心掛けたい」



倉田まゆみ Kurata Mayumi
墨田区立第三吾嬬小学校
生活指導主任、5学年主任。「褒めることを大切に、成長に向かって『明日、何をやるのか』を考えさせたい」



高山幸 Takeyama Miyuki
墨田区立第三吾嬬小学校
保健主任、6学年主任。「子どもに『愛している』と、しっかりと言葉で伝えたい」



上田智恵子 Ueda Chieko
墨田区立第三吾嬬小学校
研究主任、5学年担任。「子どもの内面を理解し、子ども同士がつながり合う授業をつくりたい」

表面には学校での出来事に関する日記と、今日の自分を振り返り、明日頑張ることを毎日書く。更に、文やイラストを自由に書けるコーナーと、自主学習を行うスペースがある。裏面には基礎・基本の定着を図る演習問題がある。5学年主任の倉田まゆみ先生は、両面を使った理由を次のように説明する。

「複数枚のプリントにすると、子どもがなぐしたり忘れてたり、集中して取り組めなかつたりするので、1枚のプリントにまとめました。教師のチェックも効率がよくなりました」裏面の演習問題には、子どもに自信をつけるために、授業で取り組んだ問題を載せることが多い。子どもは多く正解することで、自分の成長を実感して前向きな気持ちになれる。また、同じ問題を繰り返すことで、自分の分からないところを自覚しやすくなる。

連絡帳も家庭学習指導に活用する。連絡帳に「生活計画表」(写真2)を毎週貼り、1週間の予定を書き込む。1日の終わりに就寝時間や忘れ物の有無、家庭学習時間を子どもが記入し、保護者が確認してサインをする。返却時に添える教師のコメントは、以前より成長した点を褒めて花丸を付けるなど、子どもを励ますように心掛ける。

「子どもは先のことを把握できないと不安になり、見通しを持って過ごせません。『来週は忙しそう』『火曜はテストだ』と分かっていたら安心して書かれ、書かれた予定が保護

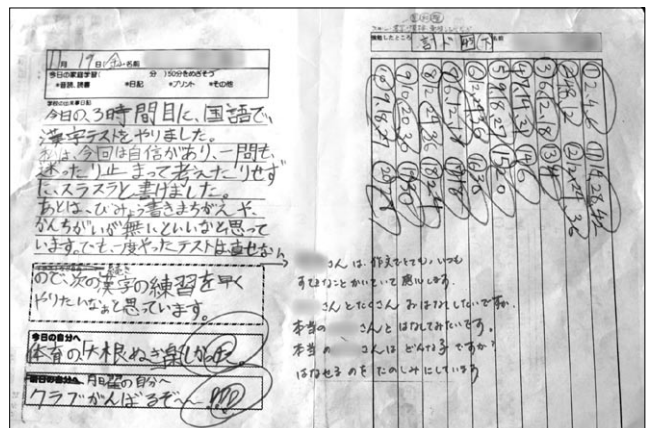


写真1 5年生「家庭学習プリント」の表面。左側には「学校の出来事日記」と文やイラストを自由に書けるコーナーがあり、「今日の自分」「明日の自分へ」(自己評価と目標)を書く。右側は自主学習(この場合は計算ドリル)に取り組むスペース

者との話題になります。また、担任のコメントは、子どもを前向きにすると共に、保護者に子どもの頑張る姿を伝える手段にもなります。褒めることを心掛けてから、連絡帳を書きこんで保護者に見せるようになった子どももいます」(倉田先生)

【6年生】

10年度の方針を「中学校を意識した取り組みをしていこう」とし、取り組みでは主体的な学習姿勢を身に付けるための自主学習を重視している。担任により宿題と自主学習の比率は異なるが、子どもの姿を伝え合いながら良い取り組みは共有している。

家庭学習ノートには、「忘れ物カード」を

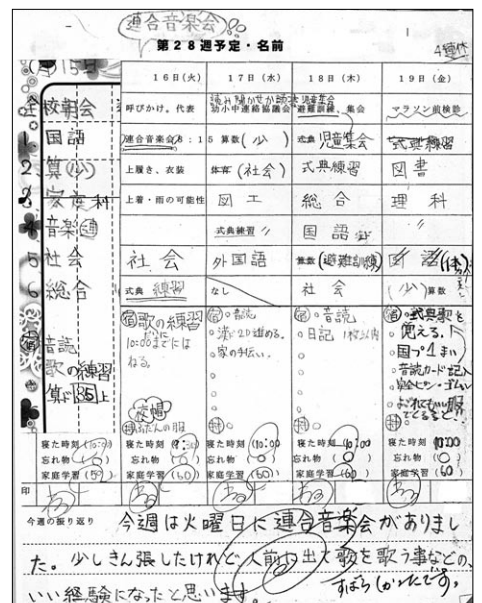


写真2 5年生の「生活計画表」。毎日、保護者がサインする欄があり、担任との間でコメントのやり取りも行う。毎日サインをもらうのが難しい家庭もあるが、「共に子どもを育てましょう」という姿勢で個別に呼び掛けている

貼っている。忘れ物が多かったため、中学校入学前に生活習慣を見直す必要性を感じたからだ。毎日の忘れ物の状況や就寝時間などを記入し、更に子どもの振り返りと教師のコメントによって、規則正しい生活習慣の自覚を促している。

印象的なのは、「やれるだけやってみる」という教師の姿勢だ。6学年主任の高山幸先生は次のように話す。

「学年で足並みを揃えることは大切ですが、ゼロから話し合い、すべてを整えてから始めると時間がかかってしまいます。良さそうなことは実践してみる。上手くいかなければ、相談しながら改善すればよいと思います」

授業づくりと共に深める家庭学習

補習の様子

教師全員が力を合わせ

個に応じた系統的な指導を実施

金曜日と土曜日の補習は役割が異なる。

金曜日の放課後に行う補習は、1週間の授業を補うことが目的で、全学年で学級ごとに実施。内容によって、参加する子どもや人数は異なる。10年度は区の予算により外部支援者2人の協力を得て、特に個別指導が必要な子どもを集めて少人数指導を行う。

土曜の午前中に月2回行う補習は「基礎・基本」「自学」の2コースがある。対象は4年生以上、各学年で「基礎・基本コース」6人、「自学コース」15人程度だ。「基礎・基本コース」は、担任が特に基礎・基本の定着を重視する子どもを選び、保護者の了解を得る。田路先生はこのコースを次のように説明する。

「学年ごとに教室を分け、一人ひとりの学力や学習進度に合わせて教科書や学校にあるドリルを用いて、教師が個別に指導しています。担当教師は当番制で、毎回カルテをつくらせて引き継ぎ、系統的な指導を心掛けています。自主的に参加する教師も多いです」

年度当初は3年生の算数の問題に取り組んでいた6年生が、1年経過しないうちに学年相応の問題に追いついたこともある。高山先生は、「その子がつまづいていない部分から丁寧に指導したことに加え、教師が近くで見

いるため、子どもが分からないことを気軽に聞ける環境にあったからでしょう」と話す。「自学コース」は自由参加で、全学年が一つの教室に集まる。各自が自力で同校独自の漢字や計算のプリントに取り組み、終わったら外部のボランティアスタッフが採点。合格すると級が上がっていく仕組みで、学習意欲を高めながら基礎・基本を強化している。

成果

自尊心や自信が高まり

コツコツと努力する子どもが増加

家庭学習の習慣化や基礎・基本の定着は確実に進んでいる。10年度の区の学力調査では、前年度に比べて学力が高まり、「自分はコツコツと勉強をしている」と答える子どもの割合が大幅に増えた。

「『やれば伸びる』という実感から自尊心が高まって自信が付くと共に、努力の大切さを知ったのでしよう。学習に向かう姿勢も変化し、特に高学年はかなり創造的な学習活動が出来るようになってきました」(金谷校長)

個々の子どもへの対応が多く、教師の負担は大きい。チームワークの良さが取り組みを支えている。学年担任制によって、教師が「一人ぼっち」にならない状況をつくるなど、学年でも学校全体でも教師が協力し合える仕組みや雰囲気大きな強みだ。

金谷校長が重視する

校長としての役割

子どもたちは小学校を卒業後3～10年ほどで社会に羽ばたいていきます。自分の力で未来を切り開ける子どもを育てるために、先生方の力を十分に引き出し、少しでもよい教育を実現することが、校長としての私の使命です。先生方はとても頑張っていて、感謝に堪えません。「大変だけれど、やりがいがある」と感じてもらえるように、教師としての楽しさを感じられる学校にしたいと思っています。これからも、先生方が情熱を共有し、ベテランが若い教師を伸ばしていけるような組織づくりに取り組んでいきます。

「取り組み自体は決して特別ではありませんが、教師が日常的にコミュニケーションをとって、子どもにとって何が大切かを共有し、よく考えて動いています。『やればやっただけの成果がある』という実感も、前向きな気持ちを生み出しています」(荒堀副校長)

ベテランと若手が認め合う関係も組織力をより高めている。「経験年数に関係なく、課題に対して共に悩み、改善策を考えていく関係があります」と、上田先生は話す。

金谷校長が大きなビジョンを示し、現場の核となる教師がリーダーシップを取り、個々の教師が連携し協力し合う。そのような組織運営が、取り組みを大きく推進させている。